

I B-13 計算その他高次精神活動 によって誘発される反射てんかんの 一症例

大阪大学精神神経科¹ 大阪回生病院² 梅新診療
所³ 大阪大学健康体育部⁴ 大阪外国語大学⁵

○山本 忍¹ 江川 功² 山本順治³ 河崎建人¹
山下 仰¹ 白石純三⁴ 志水 彰⁵

高次精神活動によって誘発される反射てんかんの報告例は少ない。今回我々は暗算及びそろばん算が主な賦活因となる反射てんかんの一症例を経験したので報告する。

症例は31歳女性、右利き。既往歴に問題なし。母親に子癇の既往があるが、てんかんの負因なし。昭和48年、17歳時そろばん等の手指の細かい運動をしている際右手指及び右前腕がピクピク動くことに気付いた。1年後、数学の試験中に全般性強直間代発作を起こし、P B, P H T 合剤を処方され、不規則ながらも服用していたが発作抑制には至らず、右手指のミカニ-及び数秒間の意識消失発作が度々起こり、年に2, 3回は全般性強直間代発作を呈していた。月経直前、月経中に頻発する傾向を認める。C Tでは異常なし。

昭和62年梅新診療所初診、種々の計算を中心に、構成行為、読字、書字等の神経心理学的脳波賦活を行った。誘発される臨床発作は暗算の場合は非定型欠神であり、書字及びそろばん算の場合は利き手のミカニ-発作であった。賦活される異常脳波は全般性棘徐波であり、左右同期性であったが、暗算にtappingを組み合わせた場合は左F-Cから始まるが多かった。脳波上の賦活効果は暗算で最も高く、棘徐波数32.7/min、次いでそろばん算、棘徐波数17.9/min、その他は効果は低くなり筆算、棘徐波数4.29/min、等であり、tappingのみでは賦活は認められなかった。以上より発作誘発要因として高度の精神緊張と高次精神活動、特に計算が必要であり、非言語性高次大脳機能によって誘発される反射てんかんの一群に含まれるものと考えられるが、運動の要因も関与していることが推定される。これらの点につき、神経生理学的に考察する。

I B-14 思春期の痙攣頻度に及ぼす影響について

順天堂大学小児科¹⁾

Department of Paediatric Neurology, University
Hospital of Wales, U.K.²⁾

順天堂浦安病院小児科³⁾

新島新一,¹⁾ S. J. Wallace²⁾ 齊藤昌宏,¹⁾ 許 慶子,¹⁾

佐藤保子,¹⁾ 多田英世,¹⁾ 高橋系一,¹⁾ 藪田敬次郎,¹⁾

高橋 寛,³⁾ 大塚親哉³⁾

痙攣が思春期に増加することはGowers (1885)により報告され、今日でも多くの医師がしばしば経験するところである。しかし、長期間外来にてfollowされているてんかん児が、思春期に痙攣が増悪するか否かに関する報告はきわめて少ない(Diamantopoulus & Crumrine 1986, Rosciszewska 1987)。今回私共はRetrospectiveに思春期前より思春期に至るまで観察しえたてんかん児の痙攣頻度の変化について痙攣のtype別に検討した。(対象および方法)英国のUniversity Hospital of Walesの小児神経外来および順天堂大学小児科およびその関連病院に来院中のてんかん児で、すべてgrowth velocity chartより思春期の時期を決定でき、また思春期開始前後の痙攣頻度を比較できる計60例とした。これらについて抗痙攣剤の投与量および血中濃度も同時に検索した。痙攣の分類はInternational Classification (1981, 1985)にそって分類した。女兒の思春期の開始年齢は平均10.5歳、男児は12.5歳であった。全例のfollow up期間は平均約7年であった。結果の分析にはWilcoxon matched-pairs signed-ranks test (Siegel 1956)を用いた。(結果) Juvenile myoclonic epilepsyは従来より報告されているように思春期の開始とともに痙攣の頻度が増加し、思春期終了時には痙攣頻度が減少した。Benign epilepsy of children with centro-temporal EEG foci (BECCT)では思春期の始まる頃には痙攣の頻度が減少する傾向にあった。Generalized tonic-clonic seizures (GTCS)では思春期の開始とともに痙攣頻度が増加し、思春期終了時には痙攣頻度は減少した。しかしComplex partial seizures (CPS)では痙攣の頻度と思春期の間に一定の傾向は認められなかった。(考案)てんかんにおける思春期の影響を考える場合には痙攣のtype別に検討することが重要と思われた。GTCSではCPSよりも思春期の影響を受けることが示唆されたが、今後内分泌的な検索も必要と思われた。